

新しい「ピューリタン」像について

山本 通

On the new view of 'Puritans'

Toru Yamamoto

Kanagawa University

【要約】 かつての歴史学においては、「ピューリタン」は近代化と民主主義の担い手として研究された。しかし、現在のポスト修正主義の歴史学においては、「ピューリタン」は歴史的個体ではなく、時代状況によって変質し変形する概念として捉えられる。「ピューリタン」というあだ名は、エリザベス女王の統治期に始まる。当時のイングランド教会の聖職者の大部分はカルヴァン主義者であったが、カルヴァン主義者の中でも行動様式や思想傾向が熱心で激しい人々が「ピューリタン」と呼ばれた。宗教信仰をめぐる16世紀末以後の国際的緊張の高まりを背景として、チャールズ1世統治期のロード体制への反撥が多くのカルヴァン主義者を反体制運動に駆り立て、大主教 W・ロードはすべての反体制派聖職者を「ピューリタン」と呼んだ。さらに1630年代には「ピューリタン」運動の内部でセクト主義者と律法無用主義者が成長してくる。内乱はこのような思想状況を前提として展開した。

【キーワード】 ピューリタン ポスト修正主義 イングランド教会 カルヴァン主義 ピューリタン革命

目 次

1. イングランド宗教改革
2. イングランド教会とピューリタン
3. ピューリタン革命
4. 王政復古以後

本稿では、Coffey and P. C. H. Lim eds., *The Cambridge Companion to Puritanism* (Cambridge U. P., 2008) という論文集の内容を基に、英米での最近の「ピューリタン」像を紹介したい。筆者が初めて「ピューリタン」に興味を持ったのは、学部学生として YMCA 一橋寮にいた3年次生のころ、大木英夫『ピューリタン：近代化の精神構造』（中公新書、1968）を読んだ時だった。その後、日本でも「ピューリタン」という語を表題に使った本はたくさん出たが、いずれもモノグラフ（個別研究）であって、ピューリタンの歴史を全体として論じた本は今でもこれ以外にはない、といってよからう。それは「ピューリタン」というテーマが非常に大きいからである。

米国では第二次大戦中に、全体主義や共産主義に対抗して自由主義と民主主義が称揚されたが、そ

のルーツを「ピューリタン」に探し求める歴史研究が、HallerやPerry MillerやWoodhouseらによって精力的に進められた。大木が描く「ピューリタン」像は、それらの研究を直接に受け継いだものである。大木によれば、中世ヨーロッパにおいて個々人は「キリスト教的社会有機体」の中に取り込まれ、まるで巨大な岩塊の中に彫り込まれた彫像のような形で存在していた。しかし、近代化の過程でその岩塊が崩壊することによって、自立した立像としての近代的人間像が立ち現れる。この変化を引き起こしたのがピューリタニズムだ、というのである。大木によれば、ピューリタン運動の先駆は16世紀末にトーマス・カートライトが指導した「クラシス運動」である。そして17世紀には「メイフラワー契約」にみられる「教会契約」の思想が現れ、これが内乱期の1640年代にはレヴェラーズたちによって「社会契約」の思想に転化する。社会契約の思想を基礎にしてレヴェラーズたちは「基本的人権」「人民主権」といった、近代民主主義の基礎となる思想を歴史上初めて主張したのであり、それはピューリタニズムという源泉なしには生まれなかった、というのが大木の主張である。

民主化と近代化を焦眉の課題とした日本の戦後西洋史学ではもちろんのこと、第二次大戦後の英米のイギリス史研究においても、近代化論は学界の主流をなしていた。そこでは、議会制民主主義や近代的市場原理が、歴史的に如何にして発展してきたかが主要な問題となり、逆に時代によって変わらないものへの関心が薄く、また、それぞれの時代の全体像を描くという志向も弱かった。しかし、1970年代以後の西側自由主義世界ではいわゆる「ポスト・モダン」の思潮が興隆してきた。そしてその部分現象として、英米の歴史学界では近代化論の歴史学に対する「修正主義」の捉え方が学界の主流を占めるようになった。いわゆる「ホイッグ党史観」「マルクス主義史観」、ヴェーバー社会学やアメリカ社会学を基にする近代化論といった近代化のグランド・セオリーは「目的論」的なアプローチであるとして、うち捨てられた（ついでに言えば、日本の「大塚史学」は典型的な近代化論である）。そして、それぞれの時代の全体像があるがままの姿で捉え直すことを目的とする「修正主義」の精緻な研究が積み重ねられて、過去の時代の文化的、社会的、経済的な現象についての学界の共有財産は非常に豊かになった。

しかし「修正主義」歴史学は概して、時代によって変わらない歴史的景観を強調しすぎる傾向を持つようになった。この傾向に対する批判が「修正主義」歴史学者の内部から生まれてきた。中世後期以後のヨーロッパ社会は現在まで大きく変化し続けてきたのだから、何がそうした変化を生み出したのか、あるいは促したのか、という問題意識を持たなければ、歴史学は単なる訓誥学に墮してしまう。こうして「修正主義」を修正する立場の歴史学が興隆してくる。これを「ポスト修正主義」という。英米の歴史学界では今や「ポスト修正主義」が主流であり、グランド・セオリーを欠いたまま、幅広く精緻な研究が進められているのである。そして、英米の「ピューリタン」研究もそのような状況にある。

1. イングランド宗教改革

それでは、「ポスト修正主義」段階の「ピューリタン」はどのように描かれているのであろうか。まず強調すべきは、今や「ピューリタン」は一つの歴史的個体としてではなく、時代状況によって変質し、変形する概念として捉えられている、ということである。「ピューリタン」という語が最初に現れたのは、エリザベス1世統治期（1558～1603）なので、我われはまず、この時期のイングランド教会の特徴について、知らなければならない。

イングランドの宗教改革は、国王ヘンリー8世（在位1509～1547）が、妻であるスペイン・ハプスブルグ家出身のキャサリンとの結婚を解消しようとしたことに端を発する。ローマ教皇クレメンス7

世がこれを認めなかったので、ヘンリーは国会を召集して「上告禁止法」を1533年に成立させて、イングランドの宗教問題の最高権威をカンタベリー大主教に委ねることを決定した。次いで1534年には、「国王至上法」を成立させて国王をイングランドの教会の首長とした。こうしてプロテスタントの国民教会としてのイングランド教会が成立したが、ヘンリーは宗教信条の中身の変更については、ほとんど手を付けなかった。

だが、次のエドワード6世（在位1547～1553）の時代には、カンタベリー大主教克蘭マーによって「共通祈祷書」が纏められた。これはローマ・カトリック教会とルター派教会の両方の式文を参照して作られ、教会の式文の全てを含むものであった。1549年には「礼拝統一法」によって「共通祈祷書」の使用がすべての国民に義務付けられた。克蘭マーは、さらにこれを改訂した「第二祈祷書」を纏めたが、これはイングランド教会が国民教会であることを強調し、ミサ、祭壇、犠牲といった用語を削除し、ローマ・カトリックとの決別を明示したものであった。その使用を国民に強制する「第二次礼拝統一法」は1552年に制定された。また、1553年には克蘭マーが作成した「42箇条」の信仰箇条が国王の名で公布された。これはルター派のアウクスブルク信仰告白の影響を多分に受けたものであった。この「42箇条」の全体について重要なのは、イングランド教会の立場を単にローマ・カトリックとプロテスタント改革派の中道とただけではなく、むしろ、イングランド教会を、初代キリスト教会の教えを正統に継承する教会として位置付けたことである。ローマ・カトリックは中世において迷信と墮落に陥り、それ以後誤った道を進み続けている。これに対して、イングランド教会こそが本来のキリスト教を継承しているのだ、という立場である。

ところがエドワード6世に続いて王位に就いた異母姉メアリーはカトリック教徒であり、エドワード期の教会関係諸法を廃棄した。また神聖ローマ皇帝カール5世の息子フェリペと結婚し、国会を召集してイングランド教会のローマ・カトリックへの復帰を決議した。これ以後、苛烈なプロテスタント迫害が行われ、克蘭マーを含む300人近いプロテスタントの指導者が処刑された。迫害を免れた聖職者たちはオランダやスイスに逃れた。

しかしメアリーは在位わずか5年で病死し、その異母妹エリザベスが1558年に王位を継いだ。彼女はヘンリー8世の遺志を継いで宗教改革を推進し、国会を召集して「国王至上法」と「礼拝統一法」を1559年に成立させ、プロテスタントの国民教会を復活させた。教会組織についてはローマ・カトリックがイングランドに設立した組織をほぼそのまま利用した。教会幹部については、メアリー時代の主教たちのほとんどを解任し、カルヴァン主義に近い聖職者たちを主教に登用した。

エリザベスがカルヴァン主義に接近した最大の理由は、国際情勢に求められる。隣国のフランスではカトリックとカルヴァン主義者の間でのユグノー戦争が1562年から1598年まで戦われていた。ネーデルラントでは、1568年以後スペインからの独立を目指すプロテスタントの戦いが行われていた。スペインのフェリペ2世はイングランド侵攻の機会をうかがい、イングランド北部のカトリック勢力はメアリ・ステュアートを正統な王位継承者として擁立し、反乱を起こした。エリザベスとイングランド王国の最大の敵は国内外のカトリック勢力だったのである。

1563年にイングランド聖職者会議で制定された信仰の「38箇条」も基本的にカルヴァン主義的なものであり、これを基にして作られた「39箇条」は1571年に国会で承認されて、それへの同意がすべての公人に要求された。改革派寄りのプロテスタンティズムを民衆の間に浸透させる努力は、小教区教会の説教壇と教会裁判所を通して続けられた。IngramやHaighの精緻な研究によれば、教会法廷は民衆の道徳レベルの改善ばかりでなく、安息日厳守やプロテスタント的教理の教育に大いに貢献した。例えば、教理問答の勉強のために子供を日曜に教会に連れてこない親には罰金が科されたので、1610年代には、教理問答を正しく言えない子供はいなくなった、といわれる。大木英夫の『ピューリ

タン』は「アングリカニズム」を「ナショナリズム、国王絶対主義、受動的服従」の三本の柱に支えられた極めて反動的な体制として特徴づけているが、1630年代以前について言えば、このような評価は間違っていた、と言わざるを得ない。

2. イングランド教会とピューリタン

エリザベスとジェームズ1世の統治期（1603～1625）におけるイングランド教会の聖職者の大部分は「カルヴァン主義者」であった。彼らは「信仰のみ、聖書のみ、恩寵のみ」という宗教改革の基本思想を支持しただけでなく、救済予定説を強調した。それならば、彼らと「ピューリタン」と呼ばれた人々（聖職者と俗人）はどのように異なっていたのだろうか。歴史家たちが後に「ピューリタン」として分類するような人々は、自らを *godly people* とか *professors* とか *true gospellers* あるいは *elects* と呼んだ。このことからわかるように、それは第一に、信仰の熱心さや激しさにおける違いであった。そして、その違いは行動様式や思想傾向の違いとして現れた。つまり、歴史家たちは「ピューリタン」に特有の文化や心性の存在を指摘するのだ。

まず「ピューリタン」と呼ばれる聖職者たちは、聖書主義を徹底させたので、聖書の裏付けのない儀礼を拒否する傾向があった。例えば「十字を切ること」やサープリス *surplice* と呼ばれる白い聖服の着用を拒否した（カトリックは、それらの儀礼を聖母マリアや聖人への崇敬、聖画像などとともに、教会の歴史の中で培われた伝統として重視し、イングランド教会もその一部分を保持していた）。Collinson が強調するように、「ピューリタン」聖職者は説教 *sermon* を教会の礼拝式の中心と位置づけたが、説教の中心は聖書注解であった（カトリックやイングランド教会は、むしろ、神への「感謝の祭儀」の方を重視した）。

Hambrick-Stowe や Wallace によれば「ピューリタン」聖職者の神学の最大の特徴は、神学を思弁的にではなく、実践的・教育的に捉えたことである。カルヴァン主義神学によれば、人間は本来、救済に値しない無価値な存在である。それにも拘わらず神は「恩寵の恵み」によって、特定の人々を救済に予定された。（カトリックが認める）人間の「功德 *merit*」は救済にとってはまるで役に立たない。救済は神の側からの一方的な「恩寵の恵み」によるのである。罪深い人間は神の怒りを和らげるため、また、「救いの確証」を得るために、個人レベルでの絶え間ない自己審査と、共同体レベルでの規律と集団的な「謙虚な内省 *humiliation*」を実践しなければならない。「ピューリタン」聖職者の実践神学 *practical divinity* は、キリスト信者をそうした方向に教化 *edify* するためのものだった。

実践神学の代表者であるウィリアム・エイムズは、神学のすべてのトピックスを、神に呼び出されたキリスト信者が現世と来世において「神の意志」に従って生きることと結び付けて展開した。また、実践神学において最も影響力のあったウィリアム・パーキンズは、説教の構成を確立し、一般信徒のために自己審査の規律を確立した。

一般信者のうちで「ピューリタン」と呼ばれた人々の特徴として Collinson が指摘する第1点は「説教の追っかけ」 *sermon gadding*、つまり所属する小教区から出て、他所で説教を聞くために遠くに出かけること、であった。彼らは心に染み入る説教をする聖職者を「追っかけた」のである。また、午前中の礼拝とは別に、午後には聖書勉強会 *conference* や祈祷の会をもった。Collinson によれば、「ピューリタン」に特徴的なもう一つの行動は、断食会 *fasts* であった。ローマ・カトリック教信者は、一年の教会暦に合わせて「大齋」と「小齋」の断食を行う。現在でも、キリストと苦しみを共にするために、四旬節（復活節）が始まる「灰の水曜日」を「大齋」として断食を行い、キリストが十字架にかけられた毎週の金曜日を「小齋」として肉を食わない。しかし、「ピューリタン」の断食

は全くアド・ホックであり、宗教的・政治的事件と関わらせて行われた。例えば自然災害が起こった時に神の怒りを鎮めるために、あるいは国会の開催にあたって、国会議員に対する神の導きを確実にするために行われた。断食の実行は、聖職者たちの呼びかけによって行われ、その時には必ず数人の聖職者が連続説教を行い、目的に応じて募金活動も行われた。

エリザベス期の「ピューリタン」と呼ばれる聖職者や一般信者はこのような思想と行動の特徴を持っており、彼らはイングランド国教会の更なる改革を説教や印刷物を通して、また国会の場で求めた。しかし、彼らはイングランド教会の転覆や、そこからの分離を望んだわけではなかった。また政府や教会当局も「ピューリタン」を積極的に弾圧しようとはしなかった。Haighが教会裁判所記録を詳細に検討して明らかにしたように、この当時の民衆の中には、宗教に無関心な者や、教理を理解していない者や、カトリック的な信仰を保持している者が多かった。これらの人々の不品行や「安息日破り」を「ピューリタン」が摘発することは、国民のプロテスタント化を急ぐ教会当局にとっては、有難いことだったのだ。ただし、「ピューリタン」的聖職者については多少の軋轢があった。例えば、サープリスの着用を頑固に拒否する聖職者は懲戒免職の処分を受けた。イングランド教会内に長老教会制を持ち込もうとしたケンブリッジ大学レディー・マーガレット学寮の神学教授トーマス・カートライトは大学から追放された。彼の意を継承したクラシス運動が抑圧されると、ブラウニズムと呼ばれるピューリタンの分離主義の運動が起こったが、これはごく小規模の運動として終わった。

3. ピューリタン革命

それでは、「ピューリタン革命」とも呼ばれる1640年代のイングランド内乱において「ピューリタン」が過激派の主流となって暴れまわったのは何故だろうか。それは16世紀末から1640年代までに「ピューリタニズム」が変質して過激化したからである。そして、そのような変質は「ピューリタン」が置かれた宗教的・政治的状況の急変によってもたらされた。この点について、Tom Websterは3つの要因をあげる。第1に、西ヨーロッパにおける宗教の状況の変化。第2に、イングランド政府の教会当局の宗教政策の変化。第3に、カルヴァン主義者内部で宗教思想の分裂が起こり、過激派勢力が台頭したことである。

第1に、西ヨーロッパにおける宗教の状況を見よう。1618年に中欧のベーメン（ボヘミア）の民衆反乱をきっかけに、神聖ローマ帝国圏内でカトリック陣営とプロテスタント陣営の戦争が始まったが、やがてこれにスウェーデン王国とフランス王国が介入して、国際的な宗教戦争がその後30年間も続いた（三十年戦争）。イングランドの政治家はもとより、一般大衆もその動向について敏感にならざるを得なかった。

三十年戦争が始まった1618年には、ドイツのドルトムントで西ヨーロッパの改革派教会の代表者たちが集まってアルミニウス派の「抗議文」を検討し、これを却下して、改革派教会の教義として「二重予定説」を採択した。アルミニウス派神学者たちは、救いにとっての神の恩寵を必須のものとしながらも、あらゆる形態の「予定説」を否定し、人間の側の、恩寵を受け入れる意志を重視した。アルミニウス派の「抗議文」は改革派のカテキズムとベルギー信条修正を求めていたのである。

「救いへの選びの神の予定」という思想は「ローマの信徒への手紙」8章29節に見られるので、ローマ・カトリック教会においてもプロテスタント諸教会においても正統説として認められてきたが、深く突っ込んだ議論がなされてきたわけではなかった。一般的には「キリストへの信仰を持つ」ということ自体が「神の選び」の証拠と見做され、そのことに神の恵みを感じて神に感謝するというところで終わり、「永遠の呪い」に定められた人の存在を強調する議論は、それまであまり見られな

かった。しかしながらドルトムント宗教会議においては「その栄光を表すために、神は、人間が生まれる以前から、ある人々を永遠の命に、また別の人々を永遠の呪いに予定された」という「絶対二重予定説」が採択された。

神の本性は善であり愛なのだ、というキリスト教の基本を思い起こすならば、絶対二重予定説の誤りは明白である。しかし、うち続く宗教戦争の渦中にあったその当時の改革派神学者たちは、恐怖と憎悪に駆られて正気を失っていた。ドルトムント宗教会議にはイングランドから数人の「ピューリタン」聖職者が参加して、この結論を持ち帰り、この絶対二重予定説はW・パーキンズやW・エイムズといった神学者を経て、イングランド教会の中で大きな流れとなっていく。そして、これは1640年代の「ウェストミンスター信仰告白」に受け継がれる。

第2に、イングランド国王と教会当局の宗教政策の変化を見よう。エリザベスとジェームズ1世の統治期のイングランド教会の聖職者たちの多くはカルヴァン主義者であり、エリザベス時代のグリンダル大主教や、ジェームズ1世時代のアボット大主教は「ピューリタン」に対して宥和的であった。他方「ピューリタニズム」の中にイングランド教会の主教制にとって脅威となる要素を嗅ぎ取ったホイットギフト大主教やバンクロフト大主教は抑圧政策を採用した。それでも、ジェームズ1世時代の抑圧は過酷なものではなかった。ジェームズは情情的にカトリックであったが、彼はスコットランドの国王を兼任していた。スコットランドでは16世紀中に、国王を頭とするカルヴァン主義国民教会が成立していたので、彼はカルヴァン主義者に対して穏便に、しかも巧みに対応する術を心得ていた。

しかし、その弟チャールズ1世（在位1625～1649）は、状況を見捨てて自らのカトリック信仰を前面に押し出す愚かな国王であった。彼は、ウィリアム・ロードらの「アルミニウス主義者」を庇護して、イングランド教会の高位に就けた。ロードの宗教政策は「ピューリタン」に対する徹底した抑圧政策であった。教会の礼拝式における説教を禁止し、安息日の午後の礼拝や説教会、そして「説教の追っかけ」を禁止した。さらに、主日の礼拝自体をも大きく改変した。聖餐台を内陣の東側に移動し、これを柵で囲ませた。一般信者は聖体拝領の時には柵の前で跪くよう強制された。また、使徒信条宣言と福音朗読の時には起立し、イエスの名が呼ばれる時にはお辞儀するべし、とされた。教会には必ず聖像やオルガンを設置され、聖職者にはサープリスの着用が義務づけられた。

ロードは、神を賛美するために最も美しい典礼を神に捧げたいと願ったのであるが、それは結果的には、イングランド教会をローマ・カトリックに大きく近づけること意味した。そして、このことは「ピューリタン」のみならず、多くのプロテスタントの気持ちも国王と主教制から引き離れた。逆にロード体制派の人々は、自分たちを批判するすべての人々を「ピューリタン」と呼んだ。つまり、ロード体制下において「ピューリタン」と呼ばれる人々の範囲が拡大したのである。

こうして、1630年代から40年代にかけてイングランドでは次の8種類の宗教グループが登場してくる。それは、①ロード主義者、②穏健なカルヴァン主義者、③エリザベス期的ピューリタン、④長老主義者、⑤会衆主義者、⑥ジェネラル・バプテスト、⑦パティキュラー・バプテスト、⑧律法無用主義者である。

まず①救済論においてアルミニウス主義者で、主教制を厳格に維持し、主日礼拝のカトリック化を進めたロード主義者たちが、1630年代初めにイングランド教会の実権を握った。その結果、②救済論においてカルヴァン主義者であり、イングランド教会の現状維持を支持した多くの穏健なカルヴァン主義者たちは「ピューリタン」に接近していく。③エリザベス期に「ピューリタン」と呼ばれた人々は、救済論においてカルヴァン主義者であり、イングランド教会の漸進的な改革を目指していたが、彼らはロード主義的な「新機軸」に反対したために厳しい迫害に曝された。その典型的な事例が、法学家ウィリアム・プリン、内科医ジョン・バスウトウィック、聖職者ヘンリー・パートンの処刑であ

る。3名は国王と教会当局の教会政策を批判したために星室庁に呼び出され、1637年に有罪判決を受け、耳削ぎの公開処刑を受けた。

ロード主義者による抑圧が強まる中で、これに対するプロテスタント臣民の反感は強まり、内乱前夜までには、従来の「ピューリタン」の中では周辺の過激派であった「長老派 Presbyterians」や「会衆派 Congregationalists」が新たな「ピューリタン」の主流となっていた。④長老派は、救済論においてカルヴァン主義者であり国民教会制を支持するが、その国民教会を主教制ではなく長老教会制でもって管理することをめざした。長老教会制においては、個々の小教区の会衆は、聖職者と一般信徒代表者である「長老」が共同で運営する「長老会」によって管理される。教区の管理は、各長老会の意向を踏まえて聖職者たちの合議体が行うのである。他方、⑤会衆派（独立派ないし組合派ともいう）は救済論においてカルヴァン主義者であり、教会論においては「真の信仰者のみからなる会衆」を教会とみなす「分離主義」者であった。彼らにとっては、国民教会は不純な教会であった。彼らは、はじめは主教制を嫌って地下に潜るか、海外に移住したのであるが、今やこれを打倒するための運動に邁進するようになる。

こうして③の、カルヴァン主義者内部での、穏健派と過激派、さらには過激派内部での「長老派」と「独立派」の分裂が現れる。しかし Como によれば、それだけではなく1620年代以後に、もっと過激なグループが「ピューリタン」運動の内部で成長してきていた。それはすなわち「セクト Sect」グループと「律法無用論者 Antinomianism」であった。

「セクト」の中にもいろいろなグループがあるが、代表的なのは⑥「ジェネラル・バプテスト」と⑦「パティキュラー・バプテスト」である。M. Tolmie によれば、前者はジョン・スマイスが引き連れてオランダに移住した分離派グループから始まる。スマイスは「真の信仰者」の再洗礼を実施したが、後にメノナイト派に吸収された。しかし、メノナイト派との合流を嫌ったトマス・ヘルウィンとその仲間がロンドンに戻って、バプテスト・グループをロンドンに根付かせた。彼らは救済予定説を拒否して普遍恩寵説を支持したので「ジェネラル・バプテスト」と呼ばれた。後者の⑦「パティキュラー・バプテスト」は会衆派と同様に、救済論においてカルヴァン主義者であり、教会論においては「真の信仰者のみからなる会衆」を教会とみなす「分離主義」者であった。その会衆派との違いは、入会の際に全身浸礼の通過儀礼を行う点にあった。いずれにせよ、分離主義者は国民教会の存在自体を否定するので、政教一致を基本とするイングランドの政体にとっては危険な存在であった。

⑧「律法無用論者 Antinomianism」は、二重予定説ピューリタンの亜種として生まれた。予定説を強調する神学者たちは、自らが神に選ばれたものであることを確証するために、また、神の恵みを受けて永遠の生命に定められたことを感謝して「神の栄光」を地上に示すために、清らかな生活を実践し、自らを厳しく律するべきことを、信者に説いた。前に紹介した実践神学は、信者をそうした「聖化」の方向に教化することを旨とした。ところが、二重予定説の信奉者の中に、これに対する反動が生まれた。彼らは「ピューリタン」の実践神学は、「神の無償の恩寵」というプロテスタントの福音を損ない、神の民を「業による義」と律法主義に追い返すものだ、と主張した。Como によれば、「律法無用論」は「ピューリタン」グループの周辺ではなく、むしろ中心に近い立場の人々から唱えられた。1640年代の内乱期においては、②から⑧まですべてが「ピューリタン」の中に含まれるのである。

イングランド国内外での宗教・政治の緊張が高まる中で、とりわけ④～⑧のグループは、終末論ないし千年王国的な待望を強く抱くようになる。また、聖霊主義 spiritualism が彼らの心性を強く捉えるようになる。キリスト教の「聖霊」は、日本人一般が考える「霊」、つまり霊媒師にとりつくような「霊」や「背後霊」や「幽霊」のことではない。キリスト教の「聖霊」は「神の息吹」のことであ

り、「聖霊主義」とは神が直接に「聖徒」に働きかけて導く、という考え方である。聖霊主義と律法無用論と千年王国主義が合体した結果は、危険な過激主義になる。これに世俗的な人権論や共和主義が結びついて、内乱期の革命思想が形成されたのである。

1642年に国王派と国会派の戦いが始まり、二次の内乱を経て国会側が勝利した。内乱中にイングランドの主教制は廃止され、長老教会制の設立が決定されたが、第二次内乱以後に権力を握った独立派は、その実行に難色を示した。1649年1月末には国王が断頭台で処刑され、王政が廃止されて共和制が成立した。それ以後実質的に権力を掌握したクロムウェルは、実質的に「宗教的自由」を実現した。しかし、共和制の支持基盤は脆弱だったので、クロムウェルが死去すると、共和政権は崩壊した。

4. 王政復古以後

1659年に復活した「長期議会」によってチャールズ2世が招かれて王位に就き、1660年5月末に王政が復活した。長老主義の聖職者たちは長老教会制の実現に期待を寄せたが、国会はイングランド教会の主教制を復活させ、亡命していたロード主義者たちが主教職に就いた。1662年以後イングランド国会は「クラレンドン法典」と一括して呼ばれる一連の国教忌避者弾圧法を成立させた。こうして内乱期の「ピューリタン」はローマ・カトリック教徒とともに「非国教徒」Nonconformistsと呼ばれ、国王と国教会への完全なる忠誠を誓わない、というだけの理由で弾圧に曝されることになった。いまやイングランド教会の聖職者たちは、大部分がアルミニウス主義のロード主義者になった。しかし、非国教徒である「ピューリタン」への迫害は1688年の名誉革命を契機に終焉した。その翌年に制定された「信教自由法」が（ローマ・カトリック教徒と無神論者を除く）非国教徒を迫害から解放したのである。

王政復古期（1660～1688）に勢力が激減した「ピューリタン」諸派は、「信教自由法」成立以後、ますます衰退していった。彼らは王政復古期の長い弾圧の時期にすっかり萎縮してしまって、対外的な布教伝道活動を行わなくなったのである。したがって、多くの歴史家は1689年をもって「ピューリタニズムの終わりの時」と見做している。しかし、Coffeyはそのような通説を批判する。「ピューリタン」のカルヴァン主義神学は「ウェストミンスター信仰告白」のおかげで後世まで伝えられた。「ピューリタンの敬虔 piety」もイングランド教会の道德主義やメソディスト派に受け継がれた。そして「ピューリタン」の実践神学は、後の時代の福音主義が成長するための栄養源になった、とCoffeyは言うのである。

追記：本稿は元来、一橋大学基督教青年会の「会報」に掲載するために2014年9月に書かれた。しかし、分量的に大きくなりすぎたので掲載をとりやめた。本稿はそのような未発表の研究ノートである。本稿はまた、拙稿「近世イングランドの宗教と社会：素描」『商経論叢』第49巻第4号（2014）の副産物である。したがって、これと併せて読んでいただければ幸いである。本稿は更に、拙稿「救済予定説とプロテスタントの職業倫理」『商経論叢』第51巻第1号（2015）（のちに拙著『禁欲と改善：近代資本主義形成の精神的支柱』に第3章として所収）の土台となるものでもあったことを、記しておきたい。